

## スキンケアチーム活動の評価と今後の課題

### Assessment of Action in Skin Care Team Education Program : Current Issues and Future Directions

西3階病棟 伊藤廣子	東2階病棟 丸山貴美子
西5階病棟 三橋真紀子 丸山公子	東4階病棟 両角裕子
西6階病棟 百瀬悦子 伊藤喜世子 柳沢美保	東6階病棟 中野和美
外来部門 亀谷博美 赤羽公子	看護部 加藤祐美子 西沢尊子

#### 《要旨》

スキンケアチームは、専門的に院内全体のスキンケアと相談や指導を行うことを目的として、有志によって立ち上げられた自発的グループである。平成16年度の活動は、導尿教室の開催、スキンケア専門コース開講の支援、スキントラブルに関する院内ラウンドと相談などを行った。また、活動の評価として、看護師対象のアンケートを行った。

これらの結果から、今後の活動について、次の5項目が課題として明確になった。

- ① スキンケアチームの連絡先、メンバーを明確化と、タイムリーな対応とフォロー。
- ② ラウンドの日時の明確化、および、スキンケアチーム内や病棟スタッフ間でのケアの継続。
- ③ 事例や活動内容、新しいケアなどの定期的な報告と院内での共有。
- ④ 導尿教室のような実践的看護技術の勉強会の開催。
- ⑤ 医師やコメディカルとの協働関係の構築。

#### 《キーワード》

スキンケア 病棟ラウンド 技術指導

#### I. はじめに

スキンケアチームは、平成15年度に、専門的に院内全体のスキンケアと相談や指導を行うことを目的に、看護師13名による有志によって立ち上げられた自発的グループである。平成16年度の活動は、導尿教室の開催、スキンケア専門コース開講の支援、スキントラブルに関する院内ラウンドと相談などを行った。そして、その報告会も含め、各メンバーまたは病棟から出された事例を月1回の定例会の際に検討した。

今回、我々の活動を振り返り、その評価を行った。また、当院の看護師の評価も得て、今後の活動への指針とすべく、アンケート調査を行った。それらの結果を踏まえ、今後の課題を明らかにできたので報告する。

## II. 方法

1. 導尿教室の開催、専門コースの支援を行う。その際、受講者にアンケートを依頼し、意見を求める。
2. 院内ラウンドの結果を集計。
3. 当院看護師対象にアンケート調査を行い、スキンケアチームの周知度、相談内容、今後希望する活動内容などを明らかにする。倫理的配慮としてアンケートへの提出は対象者の自由意志に基づくものとして無記名で、自由投函とした。

## III. 結果

### 1. 導尿教室について

導尿教室は新人看護師対象に、5月から6月にかけて合計10回開催した。教室の参加人数はのべ49名で、そのうち92%が1、2年目の看護師であった。(表1) この導尿教室は、参加者の個々の質問に答え、実技指導を中心に研修することを目的としていたため、1回の受講者は5名以内に限定し、1回の指導者の人数は2名以上で行った。参加者からは、確認できたこととして、男性の陰茎の持ち方、カテーテルの固定方法があげられた。(表2) また、「実習は講義より身につく」「教室の後、さらに現場でも実施でき、自信になった」「少人数でやったので、本音をいろいろ聞け、基本が学べた」「とても楽しかったので、今でも楽しさと一緒に技術を覚えている」などの意見をもらった。また、1年目の看護師を対象とした教育委員会のアンケートでは、技術習得にもっとも効果的であった研修として、導尿教室を挙げていた人が多かった。

スキンケアの専門コースは5回開講し、のべ95名の参加があった。受講者からの意見は、「来年度は事例や実技など実践的なものを加えてほしい」という意見が多く聞かれた。

表1 看護師の経験年数

1年目	33人
2年目	12人
3～5年目	3人
6年目以上	1人
合計	49人

表2 確認できたこと

①男性の陰茎の持ち方	92%
②カテーテルの固定方法	88%
③2人で行う	76%
④患者の右側に立つこと	76%
⑤女性の尿動口の確認方法	76%
⑥深呼吸のタイミング	76%
⑦無菌操作で行うこと	67%
⑧深呼吸のタイミング	67%

### 2. 院内ラウンドについて

平成16年5月から12月にかけて月2回メンバーが2人一組で合計14回の院内ラウンドを行った。院内ラウンドでは対象患者数の把握と問題の有無の確認、トラブル時の指導を行った。スト

一マ・褥瘡・失禁・スキントラブル患者のべ数は、394名であった。その内訳はストーマ患者130名、褥瘡56名、尿失禁患者74名、便失禁患者77名、スキントラブル患者57名であった。ストーマ患者は救急部を含む16部署中11部署、褥瘡患者と尿失禁患者はそれぞれ14部署、便失禁患者とスキントラブル患者は全部署に見られていた。(表3) 具体的なケア指導は5名、一般的な指導・助言は1ラウンドあたり3件、ラウンドの結果報告の中で検討した事例は5件であった。

表3 院内ラウンドの結果

ストーマ患者	130名 (16部署中11部署)
尿失禁患者	74名 (16部署中14部署)
便失禁患者	77名 (全部署)
スキントラブル患者	57名 (全部署)
褥瘡患者	56名 (16部署中14部署)
合計	394名

### 3、 当院看護師へ実施したアンケート調査について

この調査は、平成16年12月に当院全看護師対象に実施した。配布枚数411枚のうち回収は280枚で、回収率は68.1%であった。

- 1) スキンケアチームを知っていたのは、260名(98%)であった。(図1) スキンケアチームによる院内ラウンドが行われていることを知っていた看護師は233名(83%)であった。(図2)

図1

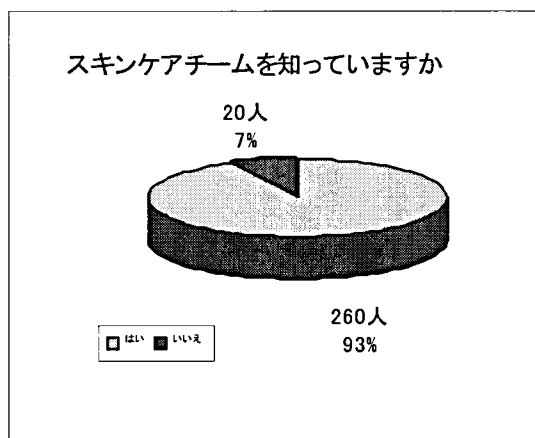
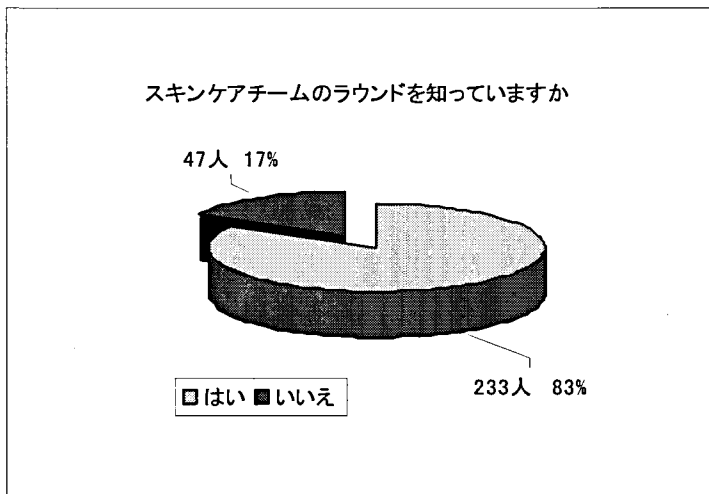


図2



2) スキンケアチームに相談をしたことがある看護師は81名(29%)おり(図3)、経験年数別では、1から6年目は37名、7から19年目では31名、20から30年目では11名の看護師が何らかの相談をしていた。(図4) 相談をした内容は88件あり、その内訳は、褥瘡に関する事42件、ストーマケア26件、失禁による皮膚トラブル9件、瘻孔の処置に関する事7件、切傷処置など4件であった。

図3

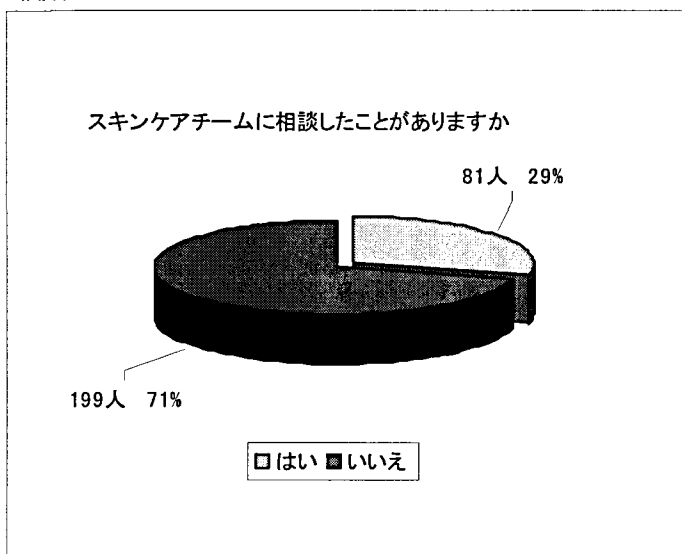
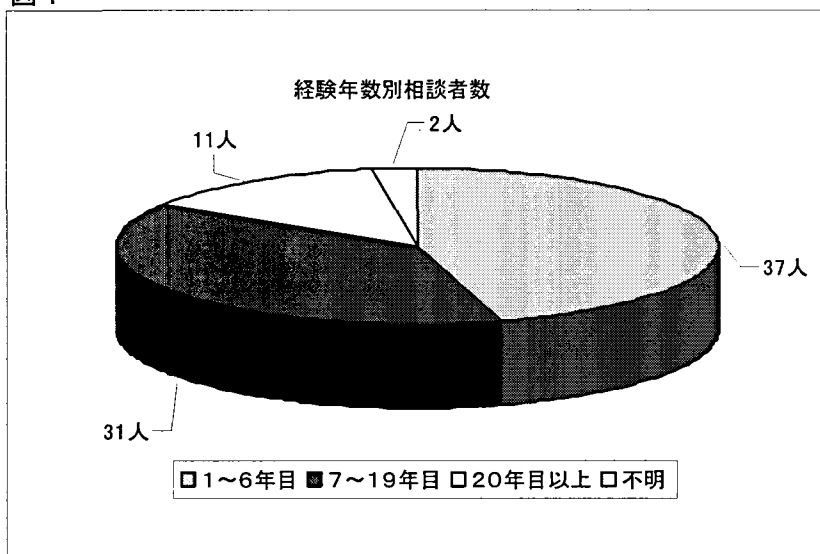


図4



3) スキンケアチームの我々の対応については77名(94%)が「充分だった」と回答し、5名の看護師が「十分でなかった」と回答している。その内容は、物品の名称や説明が不足していた、難治例で期待する回答がもらえなかった、などであった。

4) 今後希望する活動内容としての回答は多数記入されていたが、次の5項目にまとめられた。

- ①ラウンドは継続してほしい。ラウンド日時を明確にし、記録用紙などを工夫し、ベットサイドでの指導をしてほしい。
- ②連絡先やメンバーを明確にし、常時相談にのってほしい。また、継続的に対応してほしい。
- ③尿留置、点滴もれ、テープかぶれ、傷の手当て、放射線治療の皮膚障害、イソジンによる接触性皮炎、褥瘡や創傷などの処置方法や褥瘡予防、スキンケア用品について教えてほしいという希望があった。
- ④導尿教室のような実践的看護技術の勉強会を開催してほしい。
- ⑤事例、活動内容、新しいケアなどの定期的な報告を行ってほしい。

#### IV. 考察

当院ではOJTによる看護技術の教育を行っている。しかし、必ずしも現場で行われているすべての指導内容が妥当とはいえない。当院看護部教育委員会の調査結果では、入職時に習得できている技術項目数は、年々減少傾向であると聞く。このような状況下では、専門的な技術指導を少人数で行う技術教室の開催は、今後、その必要性がさらに増すと予想される。今回我々が行った導尿教室は、教育委員会のアンケートにおいて“技術習得に最も効果的な研修”のひとつとして上げられた。この技術教室は、重要であり来年度も継続して行う必要がある。

院内ラウンドで明らかになったのは、疾病と関連した限られた病棟ばかりでなく、各病棟に幅広くストーマ患者がいることやスキントラブル事例がみられたことである。看護師対象に行ったアンケートからは、スキントラブル時は病棟毎に対応に苦慮しており、経験年数に関係なく、タイムリーで実践的なアドバイスを希望していることがわかった。また、今年度当初に、スキンケアチームのメンバーとラウンドについてアピールしたにもかかわらず、スキンケアチームへの連絡方法が周知されていない実態も浮き彫りとなった。これらに対しては、相談窓口をより明確化し、常時継続して対応できるような体制作りが必要である。具体的には、スキンケアチームの連絡先、メンバーを明確にする。病棟スタッフにもラウンドの日時を明確にし、専用の記録用紙に相談内容を残して、スキンケアチーム内や病棟スタッフ間でケアの継続をはかる。さらに、チームのラウンド結果や活動状況、新しい知識などを知らせていく試みも求められる。また、これらの活動には専門の医師や他のコメディカルスタッフとの連携が必要となってくる。現在は皮膚科や形成外科の医師との協働関係は作られてきているので、今後はさらに、他職種へも働きかけていく必要がある。

#### V. 終わりに

スキンケアチームは有志で構成されているため、現在は、ケアのコンサルテーションは勤務上都合のつくメンバーが訪問し、実施している。そのため、タイムリーな対応が難しい状況もあるが、要望にこたえられるように、チーム内で協力していきたい。また、院内のスキンケアのレベル向上を目指し、われわれ自身の知識や技術のレベルアップも図っていきたい。